ベイズリー柄

渡部明美

朝霧はオロチのごとく道跨ぎ重なる山の襞へ落ちゆく

水含む新芽（め）の香流るる長谷寺に若き僧侶の剃髪清（すが）し

新緑の伊吹山（いぶき）にバイク列なして爆音の帯空に吸われる

大岩にかぶさる波はねばり増し白波うねる午後の二木島

カイツブリ湖面切るごと泳ぎ寄り水の輪広ぐ諍いらしき

枯れてなお生きる余力を見せるごとヒマワリの種盛り上がりおり

湧き上がる雲は這松（はいまつ）撫で登り稜線消しゆく木曽駒ヶ岳

若き日の吾（あ）の筆文字は拙くも脂肪含みて塩気もありき

口惜しや夢に出てきた亡き父に告げたきことも言えず醒めにき

微笑みて孫抱く遺影の亡母（はは）の服吾の仕立てしベイズリー柄